

フィールドワーク (人・権)

(大村編 参考資料)

コース

シーハット大村（出発）

→ 天正遣欧少年使節之像 → 放虎原殉教地跡 → 本経寺
→ 大村小学校 → 針尾山トンネル工場 → 鈴田牢跡
→ シーハット大村（解散地点）

キリシタンの迫害
江戸時代の部落
江戸時代のハンセン病患者
女性・教育（障害児）
平和

を、テーマに



伊藤マンショ・千々石ミゲル（正使）
中浦ジュリアン・原マルチノ（随行）

NPO 法人長崎人権研究所

天正遣欧少年使節顕彰之像

戦国時代に、日本人で初めてヨーロッパを公式に訪問した4人の少年使節の銅像です。

この銅像は、少年達の偉業を顕彰するため、使節ゆかりの大村市、波佐見町、千々石町、西海町（現西海市）の1市3町と関係団体で作った天正遣欧少年使節顕彰会が、昭和57年(1982)に、使節の出発400周年を記念して建立しました。

像は、向かって左から、伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの順に並んでいます。

像は、長崎空港に渡る箕島大橋のたもとに建っています。

天正遣欧少年使節とは

この使節は、戦国時代に、日本でのキリスト教布教の責任者であったヴァリニャーノ神父が計画し、九州の3人のキリシタン大名である大村純忠、大友宗麟、有馬晴信の使節として派遣したものです。

使節に選ばれたのは、当時、有馬のセミナリオ（神学校）で学んでいた少年で、正使として、日向伊東氏出身の伊東マンショ、有馬領千々石出身で、有馬晴信の従弟で大村純忠の甥の千々石ミゲル。副使として、原マルチノ（現 波佐見町出身）中浦ジュリアン（現西海市出身）の4人でした。

1582年（天正10）2月20日、長崎港を出発。マカオ（中国広東省）・マラッカ（マレーシア）、コーチン（インド）を経て、翌**83年**11月10日、ゴアに到着。**84年**2月20日リスボン（ポルトガル）に向かい、8月11日到着。マドリッド（スペイン）10月。**85年**3月22日、ローマへ。ローマ法王グレゴリオ13世に謁見。

1586年4月8日、帰国の旅に。**87年**5月ゴアに到着。**88年**7月28日マカオに。禁教令のために、帰国を2年間延期。**1590年**7月21日、長崎帰港。帰国後、イエズス会に入会。

伊東マンショ 司祭となり、1612年長崎で病死。

千々石ミゲル 1601年、イエズス会を退会、その後棄教。

原マルチノ 司祭となり、14年マカオに追放。

中浦ジュリアン潜伏して、布教。1633年殉教。

【大村藩の近世部落】

明治初年「藩制一覧」戸数 75 人数 495

「九葉実録」（明治初年に編纂）の記載 「屠児」記載

- ・「邪徒 131 人を放虎野に斬らしむ」（万治元年、1658）一郡崩れ事件
- ・「宝庫野の屠戸平吉まさに時津にゆかんとす」（宝永 3 年、1706）
- ・「牟運太郎を屠戸に授く」（元文 3 年、1738）一足輕で江戸邸を脱走、盗みで他に数例
- ・「池田乱民の変」大挙 500 人で付近の住民が、部落を襲う。（慶応元年、1865）
「…6 日又会し遂に放虎野屠児の所為なるを疑いその衆凡そ 500 人、屠児の家に進撃しその家を焼き竹槍及び 梶 ^{てかせ} を以て男女十余人を毆殺す。是より先き、池田・久原・萱瀬・竹松・福重・鈴田各村牛馬斃るもの多し。人民或いは屠児の所為なるを疑い、池田の牟及び農夫等伴を結び隣村を誘惑す。隣村も亦之に応ぜんとす会 ^{たまたま}々々乞食団飯の事あり、故に此の難に及ぶ」

「大村郷村記」の記載

- ・大村の内池田分 高壺石七舛貳合三勺 宝庫野
皮屋渡
但 畝数不知

- ・千綿村 「村出目米公役賃米并諸出目の事」
「川請錢代米」三舛七合五勺 穢多渡
（彼杵村も確認－郷村記の翻刻版には「穢多」の記載は□である）

佐賀藩諫早領の牢のこと

右番の儀、御私領に罷りあり候穢多仕り候様に仰付らるべく候、牢守申し候は、諫早え罷りあり候者は、先年大村きりしたん御預の刻、その所地え籠屋相建てられ、当分番仰せ付けられ候、その後は佐賀籠番仕らず、今に無役に罷り在り候（寛政元年－1789 年 諫早家日記）

【大村キリシタン史】

1562 年（永禄 5）7 月、イルマン（修道士）のルイス・デ・アルメイダは横瀬浦（西海町横瀬）に入った。その教会で翌年 6 月初め大村領主・大村純忠と有力な家臣 20 人がトーレス（コスメ・デ・トーレス＝イエズス会布教長）によって洗礼を受けた。11 月横瀬浦が火災に遭い、1564 年領内の福田（長崎市）がポルトガル船の港となった。1567 年アルメイダによって長崎の布教が始まり、翌年トーレスは大村に入り、フショウジという所に教会を建てた。1570 年（元亀元）秋、純忠の室と子供が受洗し、大村と鈴田では信者が増加した。1574 年（天正 2）三城への攻撃と内乱を治めた後、純忠は領地内の寺院を破壊。1580 年長崎はイエズス会の知行となり、大村に宣教師の日本語学校が開かれた。1582 年少年使節が派遣される。1584 年龍造寺隆信の企てで純忠は隠居し、喜前が三城に入り、信者を迫害したが、龍造寺死後、純忠は再び政権を握った。このころ、大村領全体がキリシタンで大村と長崎以外に郡、鈴田、彼杵、時津、神浦に教会があった。1587 年純忠が死亡し、関白秀吉の禁教令によって喜前は再び信仰を離れたが、一年後教会に戻った。1588 年ルセナらの司牧の下に大村のキリシタンは平和な生活を送った。1601 年（慶長 6）玖島城に新しい教会が建てられ、宣教師の住まいもそこに移された。1604 年大村に小学校が開校され、宣教師の日本語学校も再び始まった。1605 年長崎の外町問題とのかかわりで喜前は宣教師を追放し、1606 年キリスト教から日蓮宗に帰依した。純忠の長女マリナの領地であった戸根にだけ教会が許され、ルセナ神父が滞在した。時津教会は浦上に、彼杵教会は不動山に移され、そこから宣教師の活動が続いた。1614 年徳川の禁教令で戸根の教会も閉じられた。1617 年（元和 3）郡と鷹島で 4 人の宣教師の殉教があり、大村領内は殉教の時代に入った。1619 年鈴田に宣教師のための牢屋が造られた。大村の主な殉教地は放虎原で、1625 年（寛永 2）内海のキリシタンが迫害され、1630 年外海地方の信者も責められた。ついに、1658 年（万治元）郡崩れによって大村領の教会は滅亡した。外海地方だけに潜伏キリシタンが残り、そこから五島に移住した。（結城了悟『長崎県大百科事典』）

『福者ホセ・サン・ハシント・サルバネス O.P.書簡・報告』（キリシタン文化研究会、佐久間正、中央出版社、一九七六年）

「昨年一六一九年三月に船が出帆した後に起こったことについての簡単な報告」〔1620年〕3月25日

〔管区長代理フライ・ホセ・デ・サン・ハシント・マニラ宛〕

この機会に殉教者から生じた二番目の大きな偉業は、獣類の皮をはぐことを職業としている皮屋 *cuvaya* の上に起こったことです。これらのものは牢の番をし、死刑になるものを縛って連れていく仕事もしています。この者たちは今から二年前十二人の聖殉教者が焼かれた時〔1618年11月25日〕と同じように今回も、罪であることを知っているので、処刑の仕事に出て行こうとしませんでした。キリシタン代官（事実キリシタンであった）平蔵は彼らのうちの三人を呼び出し、「自分の職業であるのになぜ出てこないのか」と叱責しました。彼らは「絶対にすることはできません。神父から教えられたからです」と言いました。「考えてみよ。もしこの仕事をしないなら、お前たちは死ななければならぬ。私を恨むな。」と言いました。彼らは「絶対に不平を言いません。あのような事をするよりも、死ぬ覚悟をしています。」と答えました。「他の者どもも同じ考えか」と訊ねると「そうです」と言ったので、他の者も呼び出しました。彼らも同じ回答をしたので、平蔵はみなを自分の家へ帰らせ、「家を出てはならぬ。また逃げ隠れしてはならぬ」と命じました。それで彼らは家へ戻り、f.339/喜んで神に命を捧げる準備をしていました。彼らの長であり金を持っているものがすべての人々とその妻子を慰め、「神が与えて下さる生活の方法を心配しなさんな。私の持っている銀は役人に見付からない処に匿しておくから、それで皆を援け養うことができるだろう」と言いました。この励ましと準備によって今まで待っていましたが、役人からは何も言ってくるまいし、今後とも言ってくるまいしと思われまふ。この人々は日本で最もさげすまれている貧しい人々ですから、聖殉教者フライ・エルナンド・デ・サン・ヨセフ及びフライ・アロンソ・デ・ナバレーテ両名は彼らに施しを与え、ミサを捧げ秘蹟を授けて彼らを援け、そのために小さな礼拝所を造りました。彼らはみなロザリオ会員であるし、常に私たちの修道会から彼らを導きに行っていますから、彼らはよくキリスト教のことを理解しロザリオの信心を熱心に行っていました。この話の事件が起こった折、彼らのうちの何名かが一番さきに会い告解をし慰めを与えてくれたのは私たちの修道会の一修道士でした。人を通して彼らを励まし教え導くほかに、修道士自らも彼らのところへ行っています。彼らに関する前記の秀れた物語は彼らから私が聞いたものです。（六七―六八頁）

注：この最後の句、および全般的に言ってこの前の文全体が、サン・ハシントが宣教師として或いは管区長代理として、長崎のこの憐れな皮屋の人々の世話をした諸宣教師のうちの一人であることを示している。

キリシタンと「癩」者

「日本には二回の収穫があるが、その時期にも臨時の施しを求め、それは日本に甚だ多い癩患者の生活の資にあて、彼らが直接家の門口に立って施しを求めないようにした。それは見る者に煩いと嫌悪の情を興させるからである。施しのうちから彼らに必要な衣服も与えられた。それによって憐れな癩患者は自分たちの造った小屋に引きこもって、そこでみな一緒にキリシタンとして暮していた。彼らは日々霊的書籍を読んだりそれについて話し、それを霊の救いのための援けとし、人々から嫌われる病気の苦しみを堪え忍ぶための援けとした。彼らの住んでいる所の近く、石を投げれば届くぐらいの所に一つの聖堂が造られ、それは癩患者が毎日ミサを拝聴したり祈るのに役に立った。そこでミサが捧げられる時にそれを聴く為に大村から人々が来たし、また古くから大村にあって多数の人々が信心のために集ってくる聖母の像が（この教会におかれたので）その像に祈りに大村から人々が来たが、癩患者はその人々とは完全に別になっていた。このように癩患者への施しの慣わしや大村から四分の一レグアあまり距たったこの教会へ大村から参拝に来る信心と風習は、私たちが追放され非常にきれいによく造られていたこの教会が取り毀されるまで続いた。」『大村キリシタン資料 アフォンソ・デ・ルウセナの回想録』

大村でベルトラン（ドミニコ会）が召し捕られた時の様子。（寛永3年）1626年

「癩病者の小屋に捕らわれし夜、その宿主にて親切なるマルタと申す女は、我等のみ縛らるるを見て、自分も共に召捕らわれよとあせり願ひしも、役人はこれを許さず、マルタは天に向って、自分をバアデレより離し給はるなと叫びつつ、小子にすがりつき（但し）手先はなき故、云はゞ腕にて）、又跡を追ひ（但し）足先はなし）来り、人夫がそれを引き離さんとしても間入れず、且つ天に向って、ラウダアト、ドウミヌム、その他日本語のオラショを色々と唱へ、バアデレ様と離れぬ様にと叫びて已まず、かくてその夜を過すべき家おあるじに行き着きても、そこには癩病者を容れず、又牢舎に向ひても同伴は許されざりしも、御主が哀れの願を容れ給ひてや、その事長崎奉行にきこえ、奉行の命として、此女をも召捕る事と相成候。此女も、熱心に願ひ居る通り、我等と一緒に火あぶりになる様にと祈り居候。云々」『アフオン・デ・ルセナの回想録』

（癩病院の場所は不明）

（カトリック教会が全国で救癩活動）サン・ラザロ病院 ミゼリコルディア（慈悲会）

注：ここで使われている「癩」という言葉は、現在ではハンセン病を指しますが、江戸時代は、必ずしもハンセン病をさすのではなく、重度の皮膚病患者も含まれていました。資料の引用ですので、そのまま使用していますが、この言葉は、つい最近まで差別的な意味合いを持って使用された言葉です。

放虎原斬罪所跡

（日本 205 福者殉教顕彰碑）

1563（永禄6）年、第18代領主大村純忠公が受洗し、領民の殆どがキリシタンになり、信徒6万、教会70を数えた日本の小ローマと呼ばれ、キリシタン王国となっていた大村は迫害が最も激しく、多くの殉教者を出したが、処刑は殆どが此处放虎原の斬罪所で執行された。

これら殉教者の内、大村最初の殉教者が出た1617年から1632年迄に、大村、長崎その他で殉教したキリシタンのうち205名に、1866年ローマ法王より聖者に列せられる前の「福者」の称号が贈られ、その百年祭を記念して「斬罪小屋」の跡に昭和43年に「日本205福者顕彰祈念碑」が信徒らの浄財によって建てられ、毎年此所で日本各地から巡礼団千数百名を集めて「大村殉教祭」が盛大に行われている。

祈念碑のレリーフは中田秀和氏の作で、レオ田中伝道師を中央に、イエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会の神父たちと、日本人修道士、神学生、神父の宿主、幼児とその母イザベラ（日本婦人）等を表している。

（大村潜伏キリスト教徒殉教顕彰碑）

1657年（明暦3年）10月11日に端を発した郡崩れのため、大村藩郡村（現在の竹松・福重・松原地区の総称）中心に多くの潜伏キリシタンが捕らえられ、実に608名の多きに及んだ。吟味取り調べの結果、赦免99名、牢内病死78名、永牢20名を除いた411名が斬首された。

大村の放虎原で131名、長崎で123名、平戸で64名、島原で56名、佐賀で37名と5カ所でそれぞれ1658年（万治元）7月27日を期して一斉に処刑された。

大村では131名が放虎原処刑場に造られた桟敷内において次々に打ち首となり、真理の証しの大殉教を遂げ、斬首された首は獄門にかけられた。

郡崩れ 1657年(明暦3) 608人の投獄者

赦免 99 人 永牢 20 人 斬首 411 人 病死者 78 人
長崎・平戸・島原・佐賀（諫早）

妻子別れの石
胴塚跡
首塚跡



【本経寺】

大村藩主喜前の創建。完成は 1608 年（慶長 13）頃。日蓮宗。代々の藩主、家臣の墓。大村家墓所は、78 基の墓塔で構成される。大型の石塔は、仏教への帰依をアピールするねらいがあったとされる。

大村市古町 1 丁目にある大村家の菩提寺本経寺（ほんきょうじ）と大村藩主一族の墓所です。

本経寺は慶長 10 年（1605）に初代藩主大村喜前（よしあき）によって創建された日蓮宗の寺院です。戦国時代、キリシタン大名大村純忠のもと、大村領ではキリシタン一色となり、神社仏閣はほとんど破壊されました。しかし、禁教の時代となり寺院の復興第一号として建立されたのが本経寺で、大村藩の禁教と仏教復興の重要な施設でした。現在でも本堂をはじめ江戸後期の建物が多く残ります。

大村家墓所には、初代藩主喜前（よしあき）から 11 代藩主純顕（すみあき）まで歴代藩主とその一族の墓があります。6 m を超す巨大な墓が建ち並び、また、様々な様式の墓は見事な石造美術品です。巨大な墓石は、キリシタン大名であった大村家が、幕府のキリスト教禁教下で、キリスト教を棄て仏教を信仰する必要があったため、仏教信仰を幕府や領民に証明するために巨大な墓を建てたと考えられます。

このようにキリスト教が盛んであった大村領で、キリスト教から仏教へという江戸時代初めの宗教政策を示す文化財として、平成 16 年 9 月 30 日に国の指定を受けました。

（大村市 HP より）



本経寺墓碑

【石井筆子の碑】

五教館御成門（大村小学校）大村藩の藩校。

1670 年（寛文 10）集義館、のち静寿園。1790 年（寛政 2）五教館。五輪の道を教える。「君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」町人や百姓にも門戸を開いた。

石井 筆子（いしい ふでこ、慶応元年 4 月 16 日（1865 年 5 月 10 日） - 昭和 19 年（1944 年）1 月 24 日）は、日本の近代女子教育者の一人。日本初の**知的障害者福祉の創始者の一人**。

筆子は、肥前国大村藩士渡辺清・ゲンの長女として生まれる。父・清は幕末から明治維新にかけての志士で、明治政府では、福岡県令や元老院議員等の要職を歴任し、男爵に叙せられた。筆子の叔父・渡辺昇も同じく幕末～明治維新の志士で、坂本龍馬と親交を持ち、薩長同盟の周旋をした功労者である。

筆子は、東京女学校を卒業後、皇后（昭憲皇太后）の命によりヨーロッパに留学。帰国後、筆子は津田梅子と共に華族女学校の教師となり、筆子はフランス語科目の授業を受けもった。そのときの教え子に貞明皇后がいた。また、鹿鳴館の舞踏会にも度々参加し、「鹿鳴館の花」と評判だった。

さらに、静修女学校の校長に就任し、近代女子教育者としても活躍した。静修女学校は後に津田梅子が主宰していた女子英学塾に引き継がれ、現在の津田塾大学となる。

筆子は、同郷の高級官吏小鹿島果と結婚するが、生まれた 3 人の娘のうち、二人は知的障害があり、あとの一人は虚弱で出産後ほどなく死亡した。その上、1897 年に夫の果が 35 歳の若さで死去する。

その後、娘を石井亮一が主宰する滝乃川学園に預けていた経緯から、学園に経済的・精神的な援助を惜しまないようになる。その過程で、園長の石井亮一の人間性に惹かれ、再婚。知的障害者の保護・教育・自立に献身する。

当時の世情は、富国強兵の政策もあって、生産能力に欠ける存在とされていた知的障害への理解は甚だ乏しく、座敷牢で一生を送る者も少なくなかった。筆子は実際に教育現場に立つ一方、華族出身であった事を生かし、皇族、華族、財界人からの支援を受けることに成功し、滝乃川学園の発展に貢献した。晩年には脳溢血で半身不随となり、更に学園維持のための莫大な借金を抱えたまま夫に先立たれる。学園の閉鎖も検討するが、学園の維持こそ夫の遺志を継ぐことと奮起し、76 歳の高齢で 2 代目学園長に就任。しかし戦時中であり、生徒や教職員の戦死など困難の続く中、学園の将来を案じつつ死去。享年 89。

その後、学園は戦争を乗り越え維持され、現在の社会福祉法人滝乃川学園として至っている。



大村小学校前

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

あいつぐ映画化

宮崎信恵「無名の人 石井筆子の生涯」

山田火砂子「筆子・その愛－天使のピアノ」

【針尾山のトンネル工場】

昭和 14 年 3 月、佐世保海軍工廠航空機本部が大村に移転決定。（放虎原あたり）

昭和 19 年 6 月、東洋一のマンモス飛行機製作工場となる。

10 月、米軍ボーイング 29 爆撃機が中国の成都より発進して二十一航空廠を直撃。爆撃により、工場の大半が全・半焼し、役 600 人死傷者が出る損害を受ける。

昭和 20 年 2 月、第二十一海軍航空本部・会計部・補給部事務所等を地下に移すため、鈴田の稲川内山、針尾山地帯に間口 2.7^{メートル}高さ 2.5^{メートル}、トンネル 8 本（延長 140^{メートル}）の隧道工事に着手。（多くの朝鮮人が徴用される。）

（出典：「第二十一海軍航空廠年表」）

◎ 戦争の記憶（05 年 6 月 14 日「長崎新聞」）

大村大空襲 軍需工場壊滅 300 人犠牲

広大な軍需工場の図面に記された無数の丸印。優に数百に上るだろうか。「全部爆撃された場所ですよ。二時間でそれだけの爆撃を食らった。壊滅だよ」。第二海軍航空廠（しょう）奉賛会の神近義光会長（79）＝大村市諏訪二丁目＝が図面を指し示しながら語る。

第二海軍航空廠とは一。「放虎原は語る―大村大空襲と第二十一海軍航空廠」（大村市発行）によると、一九四一（昭和十六）年十月、現在の大村市古賀島町一帯に建設され東洋一といわれた大軍需工場のことだ。総敷地面積三百四十万平方メートルに約五万人の航空廠員や動員学徒が詰め、二十四時間態勢で、戦闘機「紫電改」や零式水上観測機などを生産。神近会長は工場建築の設計技師として、開廠から終戦まで勤務した。

四四年十月二十五日。航空廠は米軍による大規模な空襲を受けた。神近会長の回想によれば、同日午前十時ごろ、けたたましい警戒警報、空襲警報が鳴り響いた。中国・成都から渡ってきた米爆撃機 B 29 数十機が同廠の上空から波状爆撃を展開。無数の焼夷（しょうい）弾や爆弾を雨あられのように降らせた。

廠内は火の海。「工場を死守しろ」と消火に当たった廠員を爆弾が襲った。数十センチの鋼鉄の爆弾片が顔面に突き刺さり顔半分失った者、手を切断した者…。神近会長は恐怖に震えながらも「逃げてたまるか」と負傷者の救助に走り回った。

二時間の空襲で東洋一の航空機工場はほぼ壊滅し、約三百人の犠牲者を出した。同廠飛行機部、補給部などは大村市郡地区や東彼波佐見町など県内外の疎開工場に機能を移したが、終戦後の四五年十一月に廃廠。開廠から四年でその歴史を閉じた。

同航空廠が爆撃された後、大村市では終戦まで数十回に及ぶ空襲があったとされる。同航空廠や大村海軍航空隊などの軍事施設が攻撃され、市民にも大きな被害をもたらした。陸軍歩兵四六連隊（現在地は陸自大村駐屯地）、同航空隊（現在地は陸自竹松駐屯地）が早くから整備され、文字通り軍都として発展を遂げた大村の宿命だったのか。

神近会長は、大空襲があった十月二十五日に合わせ大村市で毎年慰霊祭をしている。弔辞を読む時には、若くして死んだ廠員の姿がまぶたに浮かび、涙があふれ出る。命を散らした者たちのために、海軍

航空廠の歴史を眠らせないために「命ある限りあの時代を語り継ぎたい」と考えている。

こうした被害の半面、大村の地から飛び立った日本の攻撃機が中国の都市を爆撃した事実も存在する。

「戦略爆撃の思想」（前田哲男著）によると、日中戦争勃発直後の三七年八月十五日。大村海軍航空隊基地を発進した九六式陸上攻撃機二十機が東シナ海を越え、当時蒋介石政権が置かれていた中国・南京を爆撃。約九百六十キロを四時間で飛び、各機十二発ずつ搭載した爆弾を南京の飛行場周辺二カ所に投下。世界で初めての本格的な「渡洋爆撃」だった。

大村基地などからの攻撃機が南京、上海などの都市に実施した爆撃は「無差別爆撃」と国際社会の非難を浴びた。空襲回数は一説では一都市で数十回、延べ数千機がおびただしい数の爆弾を落としたとされる。『軍事目標』と『市街地』の境界は急速にあいまい化」（同書）し、多くの民間人にも犠牲が出たという。

著者である前田東京国際大教授は「日本を爆撃するために、中国・成都からB29が飛び立つのを見て、中国の人々は留飲を下げた」と語り、こう続けた。「被害の側面だけでなく、日本が犯した事実にも目を向け、戦争の悲惨さを後世に伝える必要がある」（大村支局・北川 亮）

大村海軍航空隊 1923（大正12）年12月開隊。軍港以外の土地に開隊された初のケース。海上部隊との共同作戦や空中、海上防衛などを主な任務とした。37年8月15日、木更津航空隊所属の攻撃機が同航空隊から中国に向けて飛び立ち、渡洋爆撃を行ったことで内外に名を知られることになった。

◎ 朝鮮人労務者

「岩松町にも陰平町にも、多数の朝鮮人がいた」－証言（1）

私の息子、〇〇〇〇は、1943（昭和18）年12月に召集され、久留米に入隊して、陸軍の衛生兵をしていました。

1946（昭和21）年9月に、除隊してきました。この針尾谷のトンネルは、確か1944（昭和19）年ごろから掘られました。大村海軍航空廠の分散工場も、同時に建てられました。トンネルは九本掘られ、そのうちの一本が完成しました。いま残っているのが、その一本です。

国鉄、いまのJRの岩松駅も、そのために1944（昭和19）年に出来ました。朝鮮人たちがつくったのです。

分散工場の中に、大林組の飯場とか、事務所がありました。

トンネル掘りには、このあたりの者が召集されていたので、大島や、黒島からもきていました。

朝鮮人はたくさんいましたが、人数はわかりません。トンネルの中から掘り出してくる土砂を運ぶ仕事は、みな朝鮮人でした。（略）

大村市 1945年8月15日現在 朝鮮人実数推定

第二十一海軍航空廠の地下兵器工場トンネル掘り作業関係の朝鮮人労務者は、岩松町（針尾谷）200名とその家族50名、および陰平町1,000名。大村海軍航空隊関係の作業員300名とその家族50名、

諏訪、池田、植松、竹松、萱瀬、野田、福重、皆同地区などの軍施設および今富滑走路造成作業などには、家族含めて 500 名、杭出津、古町などの市中心部に 300 名、大村海軍病院付近の久原郷に世帯持ちの宿舎などに 300 名、合計 2,700 名と推定する。

(出典：長崎在日朝鮮人の人権を守る会『原爆と朝鮮人・第5集』1991 年)



トンネル工場跡

【鈴田牢跡】(陰平町)

スピノラ神父ら 20 数人が 1617 年（元和 3）から 5 年間収監。

22 年長崎の西坂で処刑（元和の大殉教）

「大村市鈴田に 1617 年（元和 3）から 1622 年まであったキリシタンのための牢屋。1619 年 8 月、新牢に建て替えられたが、二重の柵に囲まれた鳥籠のようなものであった。1622 年の元和の大殉教の中心人物カルロ・スピノラをはじめ、狭い牢に多いときで 33 人が入れられ悲惨を極めたが、迫害時代に毎日ミサが行われたのは皮肉にもこの牢であった。」（宮崎賢太郎『長崎県大百科事典』）

*スピノラ

1564～1622（永禄 7～元和 8）。カルロ・スピノラ。イタリア人イエズス会司祭、殉教者。1584 年（天正 12）イエズス会入会。1594 年（文禄 3）司祭となり日本布教を志し、6 年の困難に満ちた旅のすえ 1602 年（慶長 7）長崎へ着いた。有馬のセミナリオで一年間日本語を学び、1604 年京都に移り布教活動に専念した。1611 年会計係となり同年長崎へ戻った。1614 年の大追放時は潜伏して残留し信徒の世話をした。1618 年（元和 4）長崎で捕らえられ、大村鈴田牢に 4 年間投獄された。1622 年 9 月 10 日長崎西坂において他の 56 人とともに火刑に処せられた。（「同上」）



牢見取り図